



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.260
2025.5.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— 『日本先史土器図譜』と現在 —

鈴木 正博

● 第63回 ● 「加曾利B1-2式」半精製土器

西部関東の「B1-2式」期とその前後には「精製土器様式」から形態的にも独立した「半精製土器様式」と定義すべき文様帯が認められる。大宮台地南部の「B1式」期～「B1-2式」期「半精製土器様式」については既に文献(2008)による概観が知られているが、「精製土器様式」と「粗製土器様式」の「クロス作法」から成立するとは言え、その生成過程は必ずしも単純かつ明快ではない。「半精製土器様式」の出現過程となる西部関東の「B1式」期では「精製化プロセス」(「粗製土器様式」が「精製土器様式」の擬似文様を受容する作法)が見られ、東部関東への展開となる「図譜」「B2式」等では「精製化プロセス」に加えて「粗製化プロセス」(「精製土器様式」の変容文様帯が「粗製土器様式」準拠の大型化、かつ「太い隆帯」の発達等を受容する作法)が類型化し、「相互作用の二態」として2類型に収斂・独立する。その中間の「B1-2式」期には西部関東に「粗製化プロセス」が定着する。

「半精製土器様式」の「相互作用の二態」は独立する「半精製文様帯」を形成する。ここでは「精製土器様式」の「主文様帯」に対して「副文様帯」と呼ぶが、「主文様帯」に準拠する程度の含意であり、「精製土器様式」の歴史的経緯から派生する本来の「副文様帯」とは異なる。

第69図は大宮台地周辺等西部関東に特徴的な展開を見せる「B1式」期～「B2式」期の「副文様帯」概観である。第69図の「副文様帯」は地域的な細分布と共に遺蹟に於ける「多型構造」として複合的な連絡・交渉を有し、「半精製系列」が構成される(以下、前提となる「半精製」は省略し、簡単に「系列」とする)。

「B1式」期の「半精製土器様式」は、

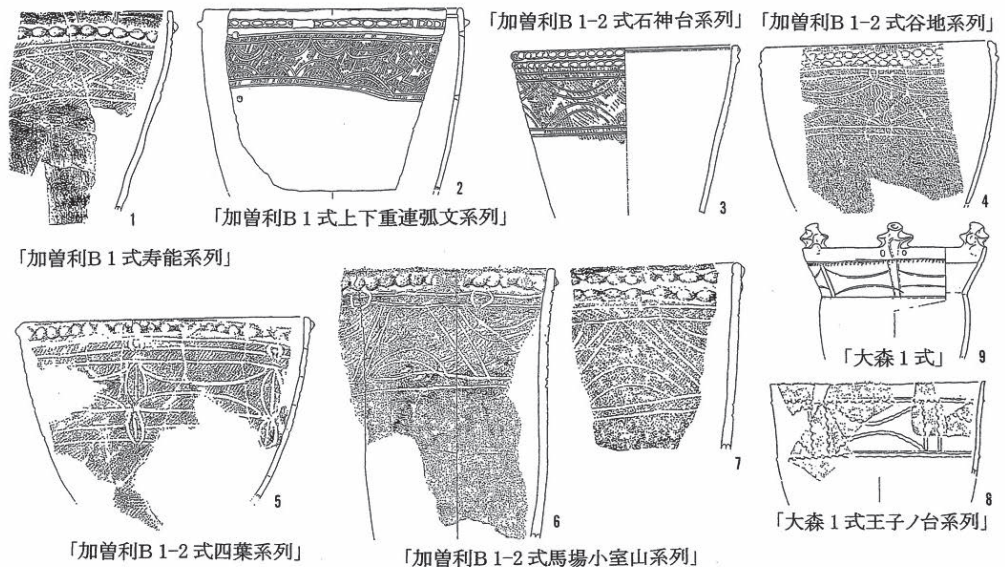
「精製化プロセス」により「精製土器様式」に準拠した独自の「副文様帯」が生成され、大宮台地南部では「寿能系列」(「稲妻文」)、並びに武蔵野台地南部では「上下重連弧文系列」(北江古田遺蹟例)や両者の部分的折衷形態(久原小学校内遺蹟例)が確認される。

「B1-2式」期の「半精製土器様式」は、「粗製化プロセス」により「副文様帯」の定型化に伴う変容が進展する(文献(2008)では該期を「精製化プロセス」と誤記しており、「粗製化プロセス」と訂正する)。大宮台地南部の「副文様帯」には「B1式」期「寿能系列」に続いて「B1-2式」期「馬場小室山系列」(独特の「山形区画内上下交互重連弧文」)が顕著な展開を見せる。「B1式」期の「上下重連弧文」は「B1-2式」期になると定型化が図られ、相模には「石神台系列」(「上下対称二重連弧文」)を中核とし、武蔵野台地北部では「谷地系列」(連弧間に区切り文を付加)に至る変容を示す。また、「精製土器様式」の文様帯と直接的な関係を

示す「四葉系列」は、恐らく第69図に見られない「B1式」期からの伝統と思われる。

「B2式」期初頭である「大森1式」の「半精製土器様式」は、「王子ノ台系列」(沈線部分を隆帯文で置換する「縦区画上下弧線隆帯文」が「副文様帯」)も石神台遺蹟等相模方面を中心とするが、隣接する東海地方の隆帯文との関係も踏まえれば、「B2式」の「遠部第三類土器」の「上下弧線多段隆帯文」等に限らず、隆帯文による文様化も射程に入る。

「B2式」期初頭の東部関東は「細別」が緒に就いたばかりで、印旛沼南岸では文献(2003)により「斜線文系土器群」等の橋渡しとなる「吉見台系列」が知られる一方、印旛沼北岸でも「西根系列」(「中妻系列」の深鉢「範型」が「粗製化プロセス」に従い大型化し、「副文様帯」も緩く大柄に変容)が出現する等、「B2式」の成立過程も順次開明へと向かうであろう。



▲第69図：西部関東に於ける「半精製土器様式」(文献(2008)から転載)

※巻頭連載は隔月です。次回は鴨志田篤二さんです。

目次

■加曾利B式土器 「加曾利B1-2式」半精製土器(第63回)	鈴木正博 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第252回)	安藤由真 …3
■考古学の履歴書 私の考古遍歴(第14回)	工業善通 …2	■考古学者の書棚 「藤岡町史」	文挾健太郎 …4

考古学の履歴書

私の考古遍歴 (第14回)

工楽 善通

前回記した訪中の後、私が2回目以降の中国訪問をするようになったのは、16年後の埋文センター長になった時からである。それまでは平城宮・京跡の発掘調査に追はれ、また、埋文センターに移ってからは、各地の水田跡遺跡の現地調査や、その成果のとりまとめに忙しく、埋文研修に忙殺されて、とても外部に出ていく余裕はない日々だった。埋文センター長に就任すると、その新設された保存科学研究室長に沢田正昭氏が当てられ、当面は平城宮跡出土木簡の保存処理推進であった。ちょうどその頃、中国北京の中国社会科学院文物研究所でも、同国内出土の木質遺物の科学的な保存法を検討中で、日本仕様の真空凍結乾燥機を設置したこともあって、奈文研の同装置と運転比較する必要があり、年に1~2回訪問することになった。

1996年私は沢田氏と共にそれに同行した。私としてはまず考古研究所を訪ねて、最近の中国内の発掘情報を教えてもらい、出版動向などを知る為に白雲翔さんを訪ねた。白さんは檀原考古学研究所に1980年代に1年近く交換留学生として滞在されたこともあり、『考古』や『文物』を編集する雑誌社の社長も兼務していた研究者で、幸い日知であった。その後も私がユネスコ奈良事務所です仕事をした際には、2003年に支石墓に関する国際シンポジウムではパネラーを務めていただいた友人である。考古研究所の次に文物研究所へ向かった。研究所(黄克忠所長)は当時開通したばかりの北京外路5に面した白い3階建てビルであったと思う。目的の真空凍結乾燥機がある保存科学室は2階にあって、1階の玄関広間脇から続く廊下の床には、日本の新聞でも報道された、新疆の砂漠地帯から運ばれてきた布に包まれたミイラが隙間なく並べられていたのを、今でもよく覚えている。装置の試運転は上々で、今後も連絡を取り合おうということになった。

1996年から2年間、埋文センターの環境考古研究室の光谷拓実氏が、「年輪年代法で渤海国の滅亡の年代を知る」というテーマで文部省の科学研究費を申請したところ、採択された。これは中国・北朝鮮の国境にある長白山(白頭山)の噴火による火山災害によって、その噴出物で渤海国の都市が埋没したため滅亡したという説によるもので、その年代はこれまで実証されていない。そこで、まずその噴火年代を確定しようとするものである。長白山火山灰は、かつて発掘した青森県の垂柳遺跡を埋没させた火山灰で、北海道の苫小牧火山灰と同質のもので、道南から東北地方にかけてこの火山灰で埋没した遺跡年代を決めるのに指標となるもので私もぜひ知りたかった。

'97年9月に中国遼寧省瀋陽に行き、市街地の中にある中国科学院瀋陽応用生態研究所の趙大昌先生を訪ねた。先生は私より5~6才年長で、長白山のことや植物全般について大変詳しい方である。まずは原生木の年輪を採取するため、自動車で長白山麓へ向かった。運転手と共に400kmも離れた標高2,700m余もある長白山まで案内して下さるのには、ほんとうに頭が下がる思いだが、それに甘えるしかない。郊外を抜け、小さな町を通り抜けると、田舎の風情ある家並みが続いて、いよいよ農村の風景となる。途中国境である鴨綠江の淵を何度も通ったが、対岸の水辺で、北朝鮮の子供達が遊んでいる風景を見た。この辺では警備が薄く容易に国境を渡れるとのことだった。山は禿山で燃料に伐採してしまつたらしい。標高800mくらいだろうか、うっ蒼とした森が

現れ、多くは長白カラ松の群生林だということだった。目通り径70~80cmくらいの木が多く、中に径1m前後の大木も時々立っていて、それを選んで光谷氏がスウェーデン製の年輪採取器を捻じ込んで年輪サンプルを採取し、私がそれを専用ケースに納めた。10本ほど採取しただろうか、森の中が暗くなってきたのでその日は終わった。近くで宿泊した後翌朝長白山山頂を目指して出発して間もなく、標高2kmを越すとも早樹林はなく低木ばかりに覆われ、やがて岩山の姿になってしまった。その岩山の谷筋の上から落差約100mもある滝が流れ落ちる景色は雄大であった。頂上に着くと既に20台ほどの車が駐車しており、数10人くらいの観光客が居て、雪混りの風が吹き寒冷厳しき天候で、待ち受けていた係員から、料金を払って軍からの払い下げ品の防寒コート借りた。さらに100m余急な坂道を登ると、標高2,744mの銘板があった。見降すと真青な天池湖があり、周囲をゴツゴツした岩山が径約2kmにわたって取り囲んでいて、真中が国境となっているそうだ。自由に写真を撮り、あまりにも寒いので駐車場に戻り、その脇にある天池温泉という大衆浴場があったので、先生に誘われて一緒に入った。その後400kmもある道のりを瀋陽にむけて我々も走った。初年度の仕事はこれで一段落で、あとは光谷氏の採取したサンプルの年代測定である。

2年度には長白山火山の噴出物が堆積した山麓東側一帯で、火山灰が厚く堆積して埋没林が存在する良所を見つけ出し、多年輪をもった炭化材を発掘することである。早朝瀋陽を出発して、趙先生同行のうえ、途中で吉林省にある研究所の附属施設である長白山開発研究站到ち寄り、副所長と職員を同乗してもらい、標高千mくらいの所で、堆積層を求めて歩き回った。何ヶ所かの発掘で、多年輪をもった炭化材を得ることが出来てほっとした。崩壊しないよう梱包して日本に持ち帰った。あとは採取したカラ松の年輪サンプルと炭化材の年輪を、中国年輪研究者の協力を得て、建造物の古材年輪を継いで年輪パターンを作成する仕事を進めていく必要がある。

帰路は北京の考古研究所に立ち寄り1泊した。出発前には、天安門広場に面してある中国歴史博物館で開催されている「中国文物精華展」を見学した。この展覧会は、近年に行われた発掘調査の成果のうち、特に注目を引く文物を一堂に集めたもので、毎年すばらしいカラー写真で紹介し、解説付きの見応えある図録を出版している。

光谷氏の年輪年代法による長白山の噴火年代は、10世紀前半という年代が出ているが、一方炭素¹⁴C年代法による測定法では、A.D.946年という年代が出され、これが世界的にも認められ一般化しているとのことである。

略歴	
1939年	兵庫県高砂市に生まれる
1958年	兵庫県立高砂高等学校卒業
//	明治大学文学部史学地理学科入学
1964年	同 大学院修士課程修了
//	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ入所
1969年	文化庁記念物課へ出向
1973年	奈文研平城宮跡発掘調査部第2調査室へ配属
1992年	奈文研飛鳥資料館 学芸室長
1995年	埋蔵文化財センター長
1999年	奈良国立文化財研究所定年退職
//	(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所勤務
2001年~2021年3月	大阪府立狭山池博物館館長

隔月連載です。次回は山本暉久先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 252

挙母城跡(桜城) ～愛知県豊田市

安藤 由真

はじめに

豊田市は愛知県のほぼ中央に位置し、愛知県内で最も大きな面積(918.32km²)を有する市です。市内にはトヨタ自動車株式会社の本社があり、自動車を中心とした製造業が盛んで、全国でも有数の製造品出荷額を誇っています。豊田市は元々「挙母市」という市名でしたが、昭和34年(1959)に自動車産業の発展に伴い、全国でも珍しい企業名を由来とする市名へ変更し、現在も「クルマのまち」として成長しています。

豊田市は工業都市である一方、平成17年(2005)の6町村との合併により、市域のおよそ7割を森林が占める豊かな自然と、多様な歴史的環境をもつ市となりました。特に合併した町の1つで現在の足助地区には、紅葉で有名な香嵐渓と、愛知県で初となる重要伝統的建造物群保存地区があり、秋の行楽シーズンになると多くの観光客でにぎわいます。

挙母城跡(桜城)について

今回紹介する遺跡は、愛知県豊田市に所在する「挙母城跡(桜城)」です。挙母城跡(桜城)は、市内を南北に縦断する矢作川の右岸に形成された沖積低地の自然堤防上に立地しています。標高は約34mで、豊田市役所から北東に約0.3kmの位置にあり、現在の市街地中心部に築かれていた城跡です。

挙母城跡(桜城)は残された文書類から、慶長14年(1609)三宅氏、天和3年(1683)本多氏、そして宝暦6年(1765)の挙母藩内藤氏と、3回にわたり築城されたことが確認されています。その中で今回紹介するのは、主に3度目の築城にあたる挙母藩内藤氏の城跡になります。

挙母藩内藤家は、寛延2年(1749)に挙母へ入封し、その後廃藩置県までこの地を支配した城持大名です。挙母城跡(桜城)の築城は、初代内藤政苗によって開始されます。計画された挙母城跡(桜城)は、寛延3年(1750)に幕府に提出した設計図の控えと想定される絵図より、本丸や二の丸が構築され、本丸には三重の櫓、二の丸は2度目の築城にあたる本多氏時代の堀を活用するものであったことが確認できます。

しかし、領内での農民の反乱や藩内抗争が発生したことにより築城の着手が遅れ、実際に工事が開始されたのは15年後の宝暦6年(1765)となりました。さらに着手後も不運は続き、矢作川の洪水が度々発生し、城内浸水の被害を受けています。この被害の影響により2代学文が挙母城跡(桜城)の築城を中止し、現豊田市美術館の敷地である挙母城跡(七州城)へと移転しました。そのため、内藤家の挙母城跡(桜城)は現存する二の丸平櫓台(豊田市指定文化財)をはじめ、二の丸部分のみ築城され、本丸などそれ以外は未完成であったと考えられてきました。

挙母城跡(桜城)の発掘調査について

4次調査で検出された本丸曲輪と堀跡 挙母城跡(桜城)では、平成18・19年の豊田信用金庫本店新築工事(1・2次調査)、平成19年の電柱等の地中化工事(3次調査)、令和5年と令和6年の集合住宅新築工事(4・5次調査)に伴う5度の発掘調査

を実施しています。

1・2次調査では、主な成果として二の丸の石垣、堀及び曲輪が検出されています。石垣は沖積地の軟弱な地盤に対応するため、石材の下に胴木を並べ、縦杭で胴木を固定する工法が採用されていました。また、堀は堀障子とよばれる土手を有する障子堀であることも確認されました。3次調査でも二の丸の堀や石垣基部の護岸施設が検出されています。

4次調査においても石垣、堀及び曲輪が検出されました。当初はこれらも二の丸に関わる遺構と思われましたが、石垣の向きや絵図から、検出された曲輪は未完成とされてきた「本丸」の一部であることが判明しました。検出された曲輪はごく僅かな範囲でしたが、これまで同時代の文書からも確認されていなかった「本丸」について、築城が着手された部分があったとする大きな成果となりました。さらに堀跡からは、矢作川の洪水被害と想定される堆積層が検出され、挙母城跡(桜城)の築城が中止となった痕跡を確認することができました。

最新調査となる5次調査については、現在、調査結果を分析し、発掘調査報告書にまとめています。報告書の完成をご期待ください。

おわりに

挙母城跡(桜城)は市街地化が進み、現在見ることができる痕跡は二の丸平櫓台のみとなっています。しかし、これまでの調査結果から、地面の下には城跡の遺構が残存していることが判明しています。引き続き開発事業などに伴い発掘調査を行い、挙母城跡(桜城)がどこまで着手されたのか、どのような構造であったのかを明らかにしていきたいと考えています。



▲挙母城跡(桜城)二の丸平櫓台



▲4次調査で検出された本丸曲輪と堀跡

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは鈴木一有さんです。

考古学者の書棚

「藤岡町史」

松田 鎮 著／藤岡町史編纂委員会 (1957)

文 挾 健太郎

はじめに

どの町にもその土地の歴史を研究してきた先人たちがいる。筆者は、群馬県藤岡市教育委員会に所属し、「文化財保存活用地域計画」の作成に携わっている。地域計画を作成する中で再認識したのは、先人たちが積み上げてきた数々の業績の上に現在の歴史認識が形成されているという当たり前の事実だった。

郷土史は、「主に戦前において地方出身者ないし地方在住者が、自らが郷土と考える地域に展開する歴史事象を研究し記述しようとした営為」(由良2010)と定義され、これに携わった人々は基本的に官学アカデミズムに属さない在野性を持つ。つい最近まで地域の歴史研究や普及を支えてきたのは、地元に住み暮らす郷土史家の人々だった。特に群馬県は、上毛郷土史研究会を主催し、雑誌「上毛及上毛人」を発行した豊国覚堂を中心として、1920年代後半から30年代にかけて全国的にみても郷土史研究が活発に行われた地域だった(大野2024)。郷土史家は学校の教員であることが多く、ここに紹介する松田鎮もその一人である。

1. 郷土史家 松田 鎮と『藤岡町史』

松田鎮は、明治13(1880)年群馬県藤岡市上田野字細谷戸に生まれ、昭和33(1958)年79歳で没した。群馬県師範学校を卒業後、教師として藤岡・平井・日野村第4小学校などで生徒の指導にあたった。教師のかたわら、雑誌『上毛及び上毛人』等に百篇以上の論考を発表し、研究者としても活躍した。主に藤岡市に関する様々な研究を行っており、現在でも藤岡市の歴史認識の基礎になっている論考も多い。その研究の集大成が『藤岡町史』である。

『藤岡町史』は、昭和32(1957)年に発行された1,600頁を超える大著であり、藤岡町の歴史について様々な角度から記されている。『藤岡町史』は昭和26(1951)年に松田が当時の藤岡町長から執筆を依頼され、5年余りの歳月をかけ作成された。資料調査を除き、本文の執筆は松田が一人で行なったようだ。群馬県藤岡市は、昭和29年と平成18年に2町6村が合併し、現在の形となった。藤岡町は昭和29年に合併した町村の1つで、十石街道と下仁田街道が交わる交通の要衝にあり、江戸時代には群馬県最大の絹市が開かれた。

『藤岡町史』は、「第1章 先史時代」から「第12章 未来記」の12章から構成されており、12章で未来記=将来への展望・希望が取り上げられているのがユニークである。『藤岡町史』というタイトルだが、中身を見てみると藤岡町だけでなく、現在の藤岡市域の事柄を広く取り上げており、周囲に目配せしながら藤岡町の地域史を組み立てようと試みている。松田は数多くの論考を遺しており、『藤岡町史』ではその成果を取り入れているが、なかには論考として文章化していない項目も含まれている。その1つが「第5章 平安時代 第1節 緑野寺と伝教大師」と「第4章 奈良時代 第8節 緑野寺と道忠禅師」である。

緑野寺は、8世紀頃に創建された道忠教団の布教の拠点であり、9世紀には最澄が東国伝道の途中で立ち寄った東国の古

代史を理解する上で重要な寺院である。現在は浄土院浄法寺の名前で活動しており、文献に記され現存する寺院では群馬県で最も古いにもかかわらず、物的資料に乏しく研究は現在でもほとんど進んでいない。松田鎮が残した研究資料が藤岡市教育委員会に寄贈されており、その中に緑野寺に関する資料が数多く存在する。緑野寺研究は、松田の研究活動の中で大きなウェイトを占めていたようだが、論考として発表されていない。『藤岡町史』は松田の最晩年の仕事であり、発行の翌年に亡くなっている。思い入れがあった仕事を公表しなかったのだろう。



▲松田鎮

『藤岡町史』は地域の詳細な情報の宝庫だ。現在では忘れ去られている事柄も多く、この本でしか知ることができない情報がたくさんある。現在では埋もれてしまいがちな郷土史家と呼ばれた先人の業績を再検討することで、郷土史(地域史)の新たな展開が得られる可能性が高い。また、松田の執念で書き残した『藤岡町史』は、記憶媒体として書籍の役割を再認識させ、書き残すことの重要性を教えてくれる。

2. 文化財保護行政担当者の役割

情報は書き残さなければ、伝わらず蓄積されない。現在では以前のような郷土史家は激減しており、その役割を果たしていた学校の教員も時代の変化や要請によって、昔のような郷土史家としての役割を担うことは難しい。しかし、郷土史家が担ってきた郷土の研究や、普及・啓発は今でも必要であることは変わらない。少子高齢化や地域コミュニティの崩壊といった現代日本の抱える問題から、その重要性・必要性は以前にも増して高まっている。

郷土史家がいなくなった現在、誰がその役割を担っていくのか。現在のところ適任は、都道府県市町村の文化財保護部局の担当者だろう。文化財保護行政が日本に根付き、都道府県市町村に文化財に関する担当者が配置され、これまでも意識的・無意識的にせよ郷土史家的な役割を負ってきた。今後はより意識的に郷土史家的役割を担っていくべきであるし、「文化財保存活用地域計画」にも表れているとおり、社会的にもそのような要請が高まっているだろう。

その際、重要なのは地域の歴史に真摯向き合い研究すること、これまでの研究の再検討をすること、さらにその結果得られた地域の価値を様々な形で伝えていくことだ。

松田鎮の仕事と『藤岡町史』がそのことを教えてくれている。

参考文献:

大野秀彰2024「群馬の郷土史と「上毛及び上毛人」—豊国覚堂の時代—」みやま文庫
由谷裕哉・時枝務 編 2010「郷土史と近代日本」角川学芸出版

アルカ通信
No.260

発行日 2025年5月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp